

## アウグスティヌス 邂逅の生涯とキリスト教

京都大学が東京・品川の「京大東京オフィス」で開く連続講演会「東京で学ぶ 京大の知」のシリーズ12「人間と宗教」。8月20日の第2回講演では、文学研究科の川添信介教授が「アウグスティヌス 邂逅の生涯とキリスト教」と題して、アウグスティヌスの自叙伝ともいえる『告白』をたどりながら、人間の生にとって宗教が持つ意味について語った。

### ●アウグスティヌスという人



「アウグスティヌスの事跡と比べ、自分はその年齢の時にどうしていたか。自分はまだその境地まで達していない。そんなことを考えながら彼の著作を読んでいます」と川添教授

「現在 58 歳。京都大学文学部・大学院で哲学を専攻し、博士課程の時に研究分野をデカルトから中世哲学に変更。現在の専門は 13 世紀以降のスコラ哲学です」

そんな自己紹介から始めた川添信介教授。

「私は、宗教学やアウグスティヌスの専門家ではない。さらに、クリスチャンとしての信仰心からアウグスティヌスを見ているのでもない。それでも、彼の著作を読み、略年表を見ながら常に自らの人生と重ねてきたので、彼についてなにがしか語るができると思っています」

神学者であるアウグスティヌスは、キリスト教に関する多くの著作を残している。キリスト教徒でなければ分からない内容ばかりではなく、理解・共有できることもある。

「その中から、自叙伝ともいえる『告白』をたどりながら、3つの邂逅にスポットを当てて、神に立ち返る信仰体験である“回心”に至る過程や生き方を紹介したいと思います」

アウグスティヌスは 354 年、北アフリカ生まれ。430 年に没するまでの事跡の多くが記録に残っている。キリスト教の確立に寄与した教父の代表であり、現在においてもカトリック、プロテスタント双方から尊敬を集めている。「東方教会からすると必ずしもそうではありませんが、影響力、存在感は大きく、西方教会を方向づけた人と位置づけられます」

## ●『告白』という書物

『告白』は397～400年頃の著作で、原題はラテン語で『Confessiones』。動詞の *confiteri* は「罪を懺悔する」「神の恵みを賛美し感謝する」という両方の意味がある。

「懺悔、賛美、感謝という順番が重要」と川添教授。自分が悪いことを認める。悪いところが神の恵みによって正される。助けてくれた神を賛美し、感謝するというわけだ。『告白』にはこの3つの要素が含まれているという。

『告白』は全13巻からなるが、大きく3つに分けられる。

第1～9巻が過去の自己の告白。第10巻が現在の自己の告白。そして、第11～13巻が『創世記』冒頭の注釈。『創世記』は旧約聖書の第1書で、世界と人類の創造などが述べられている。「3つめだけ違和感がありますよね。自叙伝になぜ聖書の注解が含まれるのか、と」

『創世記』冒頭は非常に難解で、アウグスティヌスはその後も何度か本を書くほど重要視していた部分。その注釈を書くことは、自分の聖書への理解度を示すことでもある。「つまり、自分自身を語っていることであり、ここを含めて自叙伝と呼ぶことは可能です」

## ●回心への軌跡～哲学、マニ教、懐疑主義

「32歳で迎える回心までを、私なりに理解して7つのステップに分けています」

まず第1ステップは、感覚的、肉体的、あるいは世俗的欲望にとわれている時期だ。出世を夢見て当時一番の近道であった修辞学を学び、肉欲に振り回され、観劇への欲求を抑えきれず、盗むという行為に快楽を覚えた自分を告白している。

第2ステップは、キケロの著作『ホルテンシウス』を通しての哲学（知恵への愛）への目覚め。この本には、人生において一番大切なことは哲学をすることだと書かれている。

「自分の人生を、欲望にとらわれた段階から違った境遇へと持っていきたいと思うようになる。この第1と第2にステップには大きな差がありますね」

知恵への欲求を持ったアウグスティヌスは、マニ教信者となる。これが第3ステップ。マニ教は、善悪それぞれに神がいるという二元論的世界観を持つ。「これは非常に合理的。キリスト教には善い神しかいないのに世の中に悪しきことがあふれているのはなぜか、という問いに対して、善悪の神が戦っているからだ」と簡単に説明がつきます」

しかし第4ステップで、懐疑主義に陥る。「真理への欲求はマニ教によって満たされたかのように見えたけれど、やはり真理など知り得ないのではないかという思いにとらわれるのです」。ただ「懐疑主義は決してネガティブなものではない」と川添教授。懐疑論を表す **skepticism** は、もとのギリシャ語では「探求する」の意味。疑念を持ちながらも真理を求め、探求していく態度でもあるのだ。

## ●回心への軌跡～2つの邂逅を経て決定的回心へ

第5ステップは、ミラノ司教であったアンブロシウスとの邂逅である。彼の説教から、聖書の中の神や魂に関する記述について、「文字通りの意味ではなく、象徴的に解釈してよい」ということを学んだ。

第6のステップは、新プラトン主義の書物との邂逅だ。誰しも「在るもの=物体」が絶対だと思っている。しかし、神や魂は目には見えないけれど、「在る」と言えるもの。そうした「物体でないもの」の存在を主張する新プラトン主義は、その後のアウグスティヌスの哲学的な思想形成に、大きな影響を与えるものだった。「同時に回心にとっても重要な出会いでした。物体でない神というものの存在を確信するステップですから」

いよいよ最後の第7ステップだ。

実は、アウグスティヌスはそこに至ってもなお第1ステップを引きずっており、自らそれを「古い意志」と呼ぶ。しかし、同時に真理への欲求という「新しい意志」が生まれている。新古の意志がせめぎ合っている時、どこからか「取って読め」という言葉が聞こえてきて、側にあった聖書をたまたま開く。「そこに書かれていたのは何とも神秘的な内容ですが、キリスト教的に説明するなら、“神が働いた”とでも言うのでしょうか」

そこでようやく決定的な回心に至る。回心は英語で **conversion**、「向き変わる」という意味だ。古い意志を向いていた心が、新しい意志に向き変わる。こうしたほうが良いと分かったことに従って生きるという決意が生じ、「生き方」が変わっていくのである。

回心後は修辞学教師を辞し、弟子や友人たちと修道院的共同生活を送る。さらに、ヒッポの司教に推されて多忙な生活を送りながらも、マニ教論争をはじめドナトゥス派との論争、ペラギウス論争を繰り広げていく。著作の多くは、そうした論争がもとになっている。

## ●大きな意味を持つ3つの邂逅

『告白』は実に多くの邂逅にあふれている。人、書物はもちろん、社会環境、心に抱いた疑問、神との出会いもある。邂逅は誰の人生にもあるものだが、「アウグスティヌスが他と違うのは、それらの出会いを自分の中で反省し、吟味して生かした点にある」とした上で、川添教授は以下の3つの邂逅に注目する。

まず1つめは「父母」との邂逅だ。

「自分の選択ではないのに、なぜこの父母の子どもなのか」という疑問は、誰しも感じたことがあるだろう。「なぜこの時代に生まれたのか」もしかり。「そこで、彼は偶然と必然について考えるわけです」

父母がいるから私は存在する、ということは必然のように見えるが、根本的には偶然。キリスト教の世界観からすれば「神は自由にこの世界を創造した」わけで、理由があって私はここに存在するのではない。「それでも私は受け入れられ、存在し続けている」という思いに至っていく。

2つめは「アデオダトゥスの母」との邂逅。

アデオダトゥスという息子をもうけた女性とは15年以上内縁関係にあったものの、身分の問題から離別し、母の意に叶う少女と婚約する。同女との邂逅が象徴するもの。川添教授によれば「自分の姿との出会い」だ。「自分の醜さを感じざるを得ない状況に直面しているのです」

欲望が自由の足かせとなる状態からどうやって脱することができたのか。アウグスティヌスは「自分の力ではない。神が助けてくれたから」と自覚するが、これこそ決定的な宗教性だ。彼の思想はペラギウス論争の中で明確になっていき、「自分の力で善いことができるか」という論点において、「人間が悪いことをするのは原罪のため。それでも善いことができるのは、神が助けてくれるから」と主張する。

3つめは「神と自己」との邂逅である。

回心後の著書に「ただ神と魂とを知りたい」という記述がある。魂は自分と置き換えられる。「重要なのは“神と魂”の“と”。神と魂という2つのものを別々の方法で知ることではありません」

アウグスティヌスは多くの邂逅の中で、自分を見つめ、分析することで、自分というものが明らかになった。同時に、自分を越えたところにある神の存在、神の助けを知ることになる。「自己の探求によって、自己を超越した神に出会う、ということなのでしょう」

## ●キリスト教の神とは

キリスト教の神は人格的な神と言われることが多い。その根拠となるのが、英語の

personal、ラテン語の persona (ペルソナ) だ。

キリスト教独自の思想に、「唯一の神が父・子・聖霊という 3つのペルソナを持つ」という三位一体がある。3つのペルソナは独立してあるのではなく、お互いが知り合い、関係し合い、理解し合っている。そういう神を中心にするので、人間同士も personal な関係を結ぶことができる。神が結局は 1つであるように、人間同士もよそよそしい関係ではなく、互いに信じ合い、愛し合えるようになると考える。

キリスト教の神についての説明で締めくくった川添教授。

「専門家ではない私の話でしたが、少しでも興味を持ち、『告白』を手にとってみたいという気持ちになってもらえるとうれしいですね」



「神の解釈」「回心に大きな影響を与えた邂逅」など、後半になるほどより濃密な話が繰り広げられ、参加者はぐいぐいひきこまれていった